

4178 **1月20日・大寒：小さな冒険・琵琶湖へ** ⑤

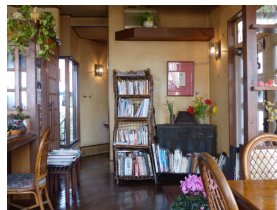
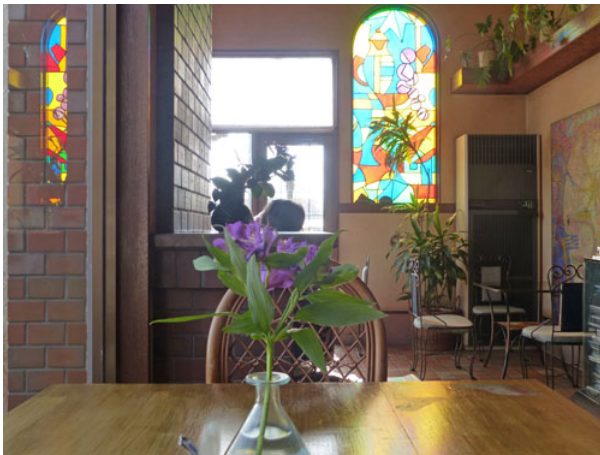
比叡山、山中越えで、少し体力消耗。時間は、午前11時。

この喫茶店と出会った。ご縁。声をかけられたように感じた。店内へ。一休み。

雰囲気も、久楽好みで、この時の心境なのか、居心地がいい。

カウンターの、おしゃれなお客さんが、お二人、常連客だろう。家庭画報を見ておられた。

私は、窓側。コーヒーを注文。素敵な器。



家庭画報は、2月号だった。1月新年号には、高校時代の同窓生が、樹木希林さんの娘さんとツーショット。いろいろな友人が、今も、多く頑張っている。

年初である。年賀状からも、大きな刺激を受けた。

出来ることしか、出来ないが、心身健康最優先。このお店の経営は、お母さんと娘さん。お母さんは、10歳上。元気をもらったのは言うまでもない。

本棚の本を、いろいろ、乱読。二十四節気、^{だいかん}大寒のことも書いてあった。

三日寒い日が続くと、その後には、四日ほど暖かい日があるという意味の、三寒四温。
中国の東北区や朝鮮半島でいわれていた、言いならわしが、日本に伝わってきたものよう。

大寒とはいえ、寒いばかりではないよ、寒暖を繰り返しながら、
だんだん春になっていくよ、という季節へのまなざしを感じられる言葉と、本に。

^{ふき}露の花が、咲きはじめるころ、凍てつく地の下で、春の仕度が着々と進む。

(新暦では、およそ一月二十日～一月二十四日ごろ)

昔は仕事を休むならわしがあったのが、一月二十日の**二十日正月**。

新年の家事などで働き通しだった女性が、体を休めに里帰り。小正月からの里帰りを

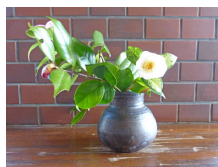
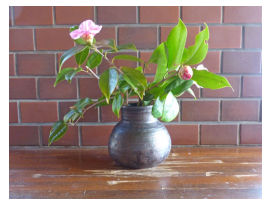
すませ帰宅する習慣があった。正月に用いた魚の頭や骨の残りで、
鍋や団子をいただいたことから骨正月、団子正月などの別名も。地方によっては、

正月のごちそうや餅を、この日に食べ尽くすなど、
正月のものは食べ残すまいという、**実りへの感謝**の思いが、二十日正月には込められていたと
旬の魚介は赤貝。旬の野菜は小松菜。旬の草花は南天。旬の野鳥は、あおじ。

旬の言葉は、^{となり}春隣。旬の魚介は、わかさぎ、と本に。

飽食の時代。いろいろ考えさされることもあった。久楽には、いい道草の時間が持てた。

10歳上のお母さんから、元気をいただいて、次のステップへ。



日吉神社、明智光秀の菩提寺、西教寺へ